

図書館通信 — 31 —

1975. 4



新入生のための特集

私と図書館

上野実朗

大学の図書館はオアシスのようなものではあるまいか。ものうい日は静かにまどろむのもよし、寒い日は光る海を眺めながら、あたたかくくつろぐのもよい。東京大学の図書館にはブラウジングルームという室がある。ここは沈思黙考したり、楽な気分で休息反省し、さらに、英気を養う所でもある。

図書館では文科の学生が理科の書物をひらくことも、物理学専攻生が佛教哲学の本を読み、物理と佛理を論ずることも自由である。私自身、昭和9年から3年間、東大文学部東洋史学科の学生であった頃、よく火薬学・印刷術・生薬学などの本をみて楽しんでた。これは頭の洗濯にもなるし、専攻していた古代史を側面から見直すことにもなった。そして科学史に興味を覚え、東洋科学史の基礎となる本草書とめぐり会い、そこから植物学に入って行った。今でも時々、館内を歩きまわり、ふと目にとまった本をひろげるのは大好きである。

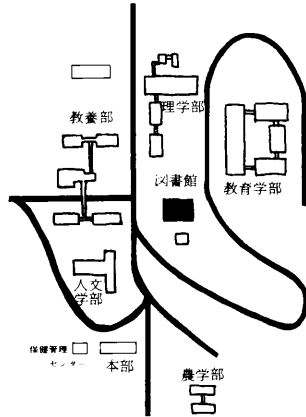
アメリカのコロンビア大学総長ジェームス・コナント博士という化学者がおります。彼は第二次大戦後、西ドイツのアメリカ占領地区最高指導者となった人です。日本には軍人マッカーサーが来て、財閥解体から手をつけましたが、西独では彼は大学再興から着手しました。何故ならドイツでは学者を尊敬していたからです。コナントは帰国して大学に帰ると、教養コースで文科系学生のために自然科学を教えることに意欲を燃やしました。彼の教え方はケースヒストリーでした。化学なら化学史、物理ならば物理学史といったように。彼は文科系の学生は広く理科の教養を身につけておくことが必要だと信じていました。私も教養部で生物学を教える時に、よくケースヒストリーの話します。

さて、彼の講義をまとめた本は「常識から科学へ」という題で日本語に訳されています。伏見康治・佐々木中二両氏の名訳です。静大図書館の請求記号407-C86です。是非一度読んでみて下さい。しかし最近ほもっと図解式のカラフルな自然科学の入門書もでてきます。図書館参考調査係と相談して、どうぞ4年間の学生生活の間、充分に学問のオアシスで楽しんで下さい。

(理学部教授・附属図書館長)

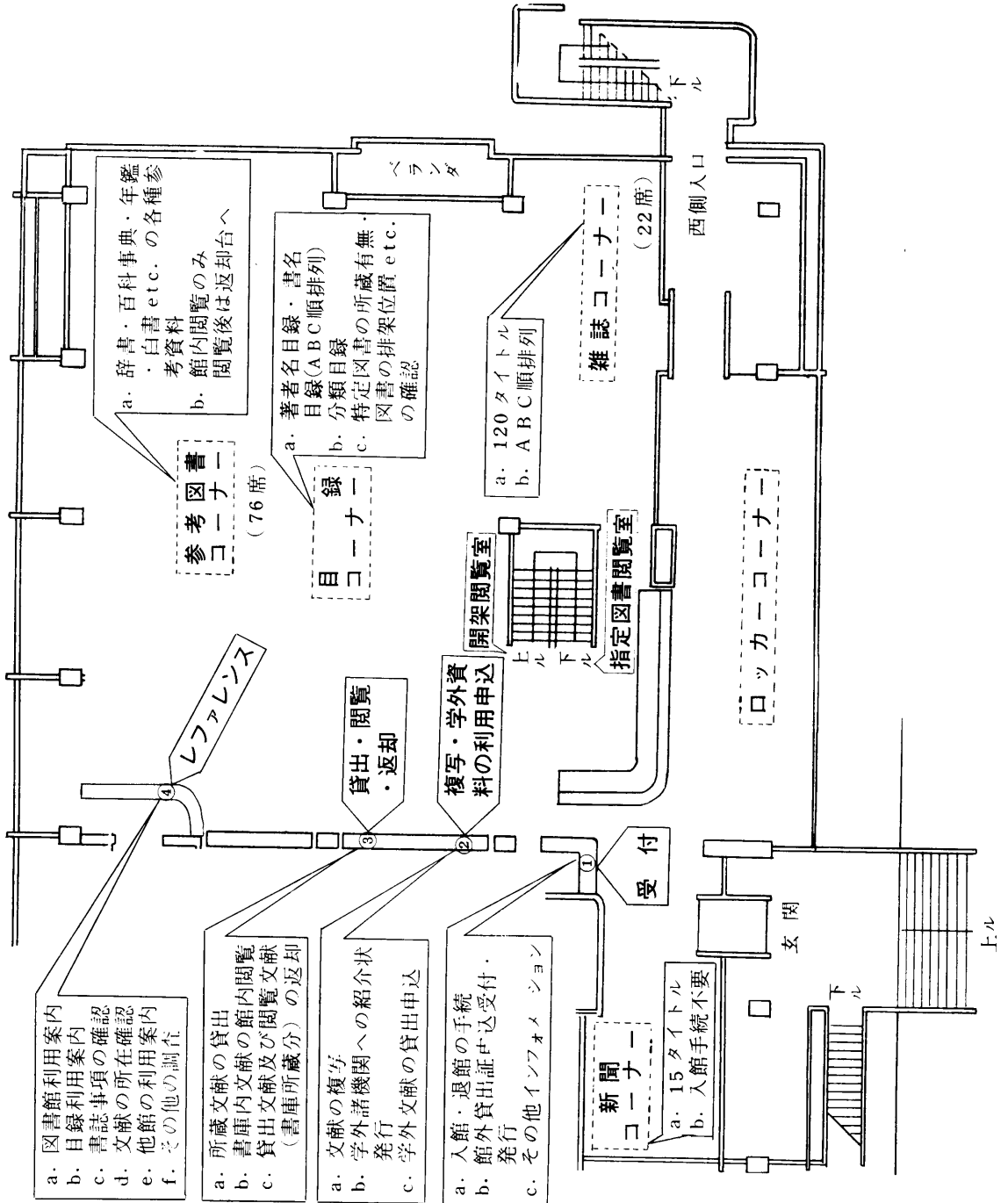
館内案内

- 期 間 4月15日(火)～19日(土)
- 時 間 第1回 11:00～
第2回 13:30～
第3回 15:20～
(但し、土曜日は第1回日のみ)
- 所要時間 毎回40～60分
- 内 容 図書館案内(書庫内見学も含む)
利用案内 他

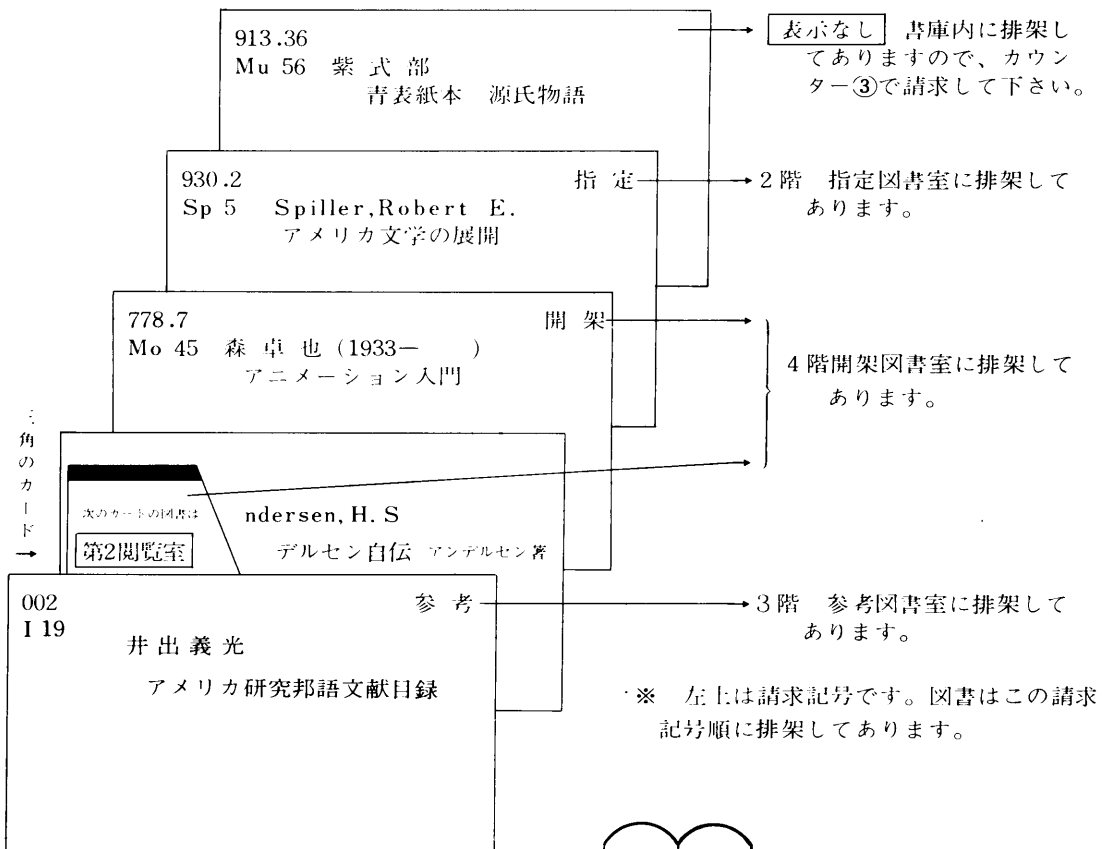


も く じ

私と図書館	上野実朗	1
図書館を散歩せよ	釜屋 修	5
私と図書館	石川 透	5
図書館随想	原秀三郎	6
良書とのふれあい	酒井鎮美	6
より充実した明日のために	小島義夫	7
雑感“むだ”	西山 裕	8
図書館案内		1～4



目録における図書排架位置の表示



蔵書の種類

開架図書……4階閲覧室に23,334冊の図書があります。ここには一般的によく利用される学生の学習及び教養のための図書が備付けてあります。

指定図書……2階閲覧室に15,829冊の指定図書があります。指定図書とは、教官が講義の内容に関連ある資料を指定し、学生はこれを読んで学んでゆく、いわゆるリザーブ・ブックの制度による図書が備付けてあります。

参考図書……3階参考室によく使用される参考図書（辞典・事典・書誌・目録等）が4,692冊備付けてあります。

書庫内の図書……古い図書および特に必要とみなされた図書は書庫にあります。これらは、全て目録にあり閲覧できます。

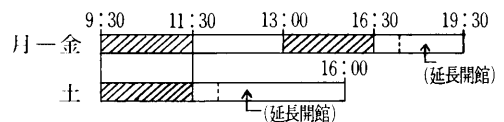
書庫内にある主な図書。

- 岩波文庫
- 岩波新書
- 旧制静岡高等学校蔵書等

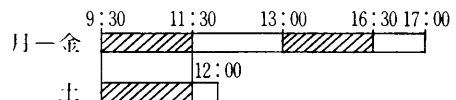


開館時間・窓口受付時間

a. 試験期(9月、1月、2月)



b. 試験期以外



(注) ①番受付、②番複写・学外資料利用申込、③番貸出・閲覧・返却、④番レファレンスの業務を行っている時間帯。

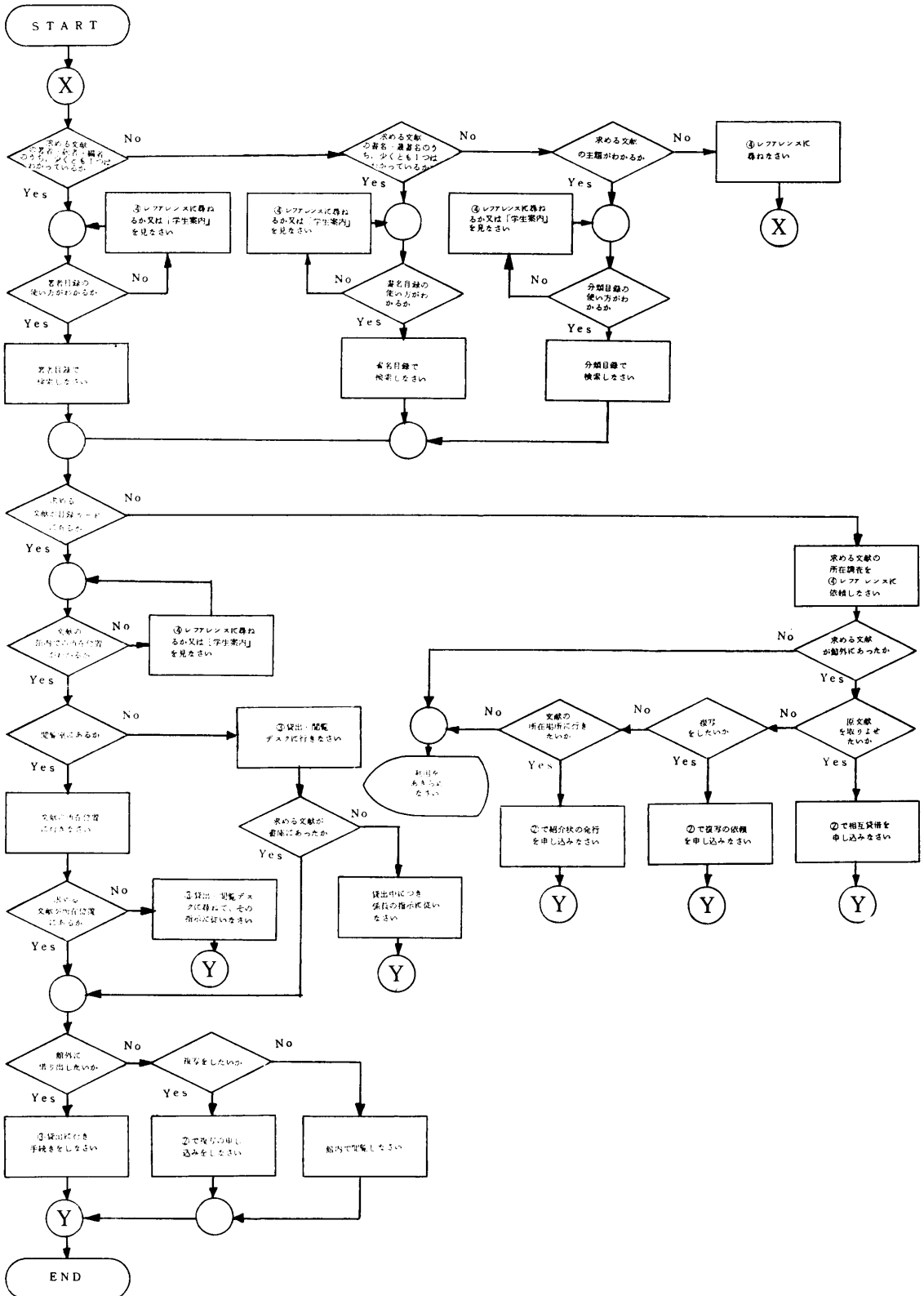
①番受付、③番返却の業務のみ行っている時間帯。

c. 休館日

日曜日・祭日・本学創立記念日(6月1日)
その他図書館業務上必要な時(「図書館通信」・掲示等でお知らせします。)

検索法

文献へのアプローチの一例（雑誌や新聞の収録記事・論文は除く）



図書館を散歩せよ

釜屋 修

私個人と図書館に限って言えば、悔いの残る学生時代であったと言わざるをえない。工兵隊の跡の木造兵舎を利用した、貸出し申請から実際に本を手にするまで3、4日を要するという“分館”が、私にとっての最初の大学図書館であったから十分に活用できなかったのだ、と言えば言いわけがましい。学舎統合後も決してガメツイ利用者とはなりえなかった。最初の図書館との出会いにおいて利用のコツを体得しておけば図書館利用を習慣化することができよう。おおげさな表現をすれば、図書館利用もまた公共文化機関の利用、その充実を願望する人間の市民的権利の目ざめの一歩であった。

特定の文献を求めて図書館を訪れるのはごく普通の利用形態であろう。同時に、開架の書物の間を散策し、カードに首をつっこむことも時には楽しい。書庫に入ることが不可能であっても専攻分野や興味あるテーマに絞っての、索引カードの中の気ままなブラリ歩きは意外な時に意外な効果を発揮するものである。図書館用のノートを一冊持って必要なものをメモしておくのもいい。

私の専攻分野に即して言えば現代中国文学関係の文献(中国文)は本学の場合きわめて少ない。しかし、日中文学交流という点で考えれば“散策”の中でいろいろ珍しいものをいくつか発見した。旧制静岡高等学校の蔵書の中にもそうしたもののいくつかがある。

夏休みなど集中的に市の図書館へある作家の作品だけを読みに通ったこともあった。図書館の人とも親しくなっているいろいろ蔵本を教えてもらったこともある。それらのことをもつとくり返しておけばよかったと今は悔やまれる。社会科学関係を30才以前にタツブリと読んでおけといわれたことも十分にできなかった。大学の四年間をかけて「資本論」をドイツ語で読むと豪語して図書館に坐っていた友はコワかった。

本学には参考調査係の人がいて何かと調査の相談に応じてくれる。その人たちのご苦勞を度外視して言えば学生諸君もおおいに活用されたいと思う。

以上は、あくまで図書館利用に限っての話である。中国でいうところの「書呆子(シュウタイズ)』

——本の虫、本のことしかわからぬ現実ばなれした知識人は、もはや時代の要請ではないし、同時に理論を無視した諸活動もまた70年代には不十分なのである。

さあ、諸君も図書館へ、いざ!!

(教養部助教授・現代中国文学)

私と図書館

石川 透

私の図書館を作ろう。館長はもちろん僕。ラベルを貼り、分類し、僕の3畳間に並べた。だが、ああ、本が足りなかった。(男子学生の「私の読書歴」より)(以下同じ)。

小学校の図書室。3年の時の教室のすぐ隣り。休み時間となれば、すぐにとんで行った(女子)。四方の壁にギッチリ詰まった書棚に驚きもし、嬉しかった(女子)。自分の貸出しカードを早く一ぱいにしたいと競争した(男子)。図書室で、ひとりゆっくり読むのが好き(女子)。

小学校6年のある日、兄と市立図書館へ。きれいな建物ではなかったが、シーンと静まって、誰もが熱心に本を読んでいる雰囲気ですっかり魅せられてしまった(女子)。

大学に入ってから市立図書館をよく利用。教育系の学生が借りようと思う本は、たいてい借り出されていないので好都合(女子)。

高校時代——。1年の時は学年で1番をとるために生きていたから、書物というものを1冊も読まなかったコンプレックス……すべてを忘れる意味でマンガを1年間に250冊も読んだ(男子)。いかめしい感じの学校図書館になかなかなじめない(女子)。3年間よく学校図書館へ行く。設備よく、蔵書も多かったが、何よりも木立に囲まれ、落ち着いた雰囲気にひきつけられた(女子)。高校図書館は、宿題レポート用、日向ぼっこ用、新聞雑誌用、そして特におしゃべり用(女子)。

美しい文章を見つけると、心がわくわくします。英語の実力テスト問題文の美しさにもうっとり、暫くはその文ばかり読み返していました(女子)。

大学図書館のアルバイトをやって以来、図書館と親しくなったようだ(男子)。大学入学、生協食堂で偶然一緒になり……僕の初恋、生活は一変した。早起き、規則正しい食事、こんな自分では恥づかしい、文学を読もう、体も立派にしよう、今まで重要視していた自然科学では扱わない別の大事なことを見つけた(男子)。

私の図書館を作ろう。

「本の道楽のゆきつくところは豆本です」——現代豆本館（藤枝市白子）館長。

母親の手づくりのはり絵の絵本。市立図書館で毎月1回話す童話のおじさん。子ども文庫。家庭文庫。何も書いてない「白い本」。

（教育学部教授 発達心理学）

図書館というものは学生にとって必ずしもファミリアなものではない。しかし、そこには青年の知的成長に必要な契機がひそんでいる。時には義務としてではなく図書館を訪れ、知識の森を散索することをすすめたい。（人文学部助教授 日本史学）

図書館随想

原 秀 三 郎

“一冊の本”を選ぶことは至難の業である。だが、折にふれて思い出す忘れがたい本ということになれば、直ちに誰れでも何冊かの書名が脳裏に浮ぶのではなからうか。いま再読している川島武宜著『日本社会の家族的構成』（日本評論社 1950年）は、私にはそうしたものの一つである。

この本は、日本社会のアジア的特質を絶対主義的天皇制の社会的基盤である家父長制的な家族制度の分析を通じて究明し、敗戦直後の民主化の課題を論じたものであるが、それを始めて手にしたのは、この本が刊行されて間もない頃の田舎の新制高校の小さな図書館——それは1928年に創立三十周年と「御大典」とを記念して建てられたとかで、校舎とは別棟の小じんまりした建物であった——でのことであった。私が社会科学的なものにふれた最初の経験ではなかったかと思う。勿論、当時の学力ではとうてい読みこなせず、とくに第四論文「孝について——観念形態としての孝の分析——」などはチンプンカンプンで、やむなく途中で投げだしてしまったことなど、書名のあざやかな印象とともに今でも記憶にまなましい。ところが、二十数年をへだてて、日本古代国家論のために、「家族国家」とそのイデオロギー研究史の一齣として読み返してみると、著者の指摘がいつしか私の“常識”になっていることにおどろかされる。例えば、日本封建制にアジア的特質を与えるものが「家族協団体」内部の家長と家族員との「家族的恭順」にありとし、それを経済外的強制の一形態とみる点などは、アジア的専制主義の基本構造を国家的規模に拡大した家父長的奴隷制＝国家的奴隷制とみる私の考え方と一脈相通するものがある。私見は直接この本から学んだものではなかったけれども、青春の一日、小さな図書館の一隅でこの本と出会い、そして苦闘したことが、こうした問題への関心を育て、社会科学的なものの見方・考え方の素地を養ってくれたことは確かである。

良書とのふれあい

酒 井 鎮 美

目の前を流れるように過ぎて行くテレビ情報や、誰かがダイジェストした週間誌などの雑誌からの知識は、情報伝播の速さと文化の大衆化には寄与したが、人の個性形成に役立たないのではなからうかという指摘がなされてからもう久くなる。それにもかかわらず、私共がテレビを見たり、平板で無味な雑誌等を読むのに費やしている時間は、個人により大差はあろうが、無視出来ない日々が続いているのではなからうか。反面、最近は多くの人々がこの種の情報・知識に物足らなさを強く感じていよう。

諸外国からくる専門誌を含め、友人や学会よりの書簡、それにダイレクトメールを含めると、研究室に限っても、毎日受信する書類は厚さにして3cmを越える。凡人にとって、それらの書類をすべて熟読することは、本分である教育および研究・実験のための時間と両立し難い。つい、表面的に読み、知識としての情報を得るのみに終る。

私事に関して恐縮だが、私の学生時代は情報科学は進歩しておらず、人から直接話を聞くか、図書を読んで自ら思索するしかなかった。中学1年のとき書架に「有機化学反応論」と言う旧制専門学校生向（今の大学の前期課程に相当しよう）の本が私の目にとまったのが、結局、私が化学を専攻する動機となった。現在、化学のおかれた立場は、今まで流してきた罪の償いを自覚し、同時に、この自覚の上になって人類のための資源利用を再検討すべき時であるが、当時中学生であった私にとって、暗記課題と思っていた化学の反応の仕組が論じられていること自身が大変な魅力であった。この一冊の古本を（新制）高等学校時代、大学時代と読み返すにしたがって、内容の理解が深まり、ついで批判し、更に新しい発展へと進んだ。一冊の本に巡り会い、その本を通して、「聞いて（読んで）得た知恵」を「思念、思索」し、それを繰り返して「我が身に修めた」のであると思う。この過程を通じて、自己の進歩・変化が認識でき、それに社会の情勢変化まである程度意識

でき、自己の反省となった。私にとって一冊の書物を熟読することが大事なことを体験した例であった。

つぎに、読書は、迷いつづける心の糧である点である。既に述べたように、私自身も高等学校時代より今日に至るまでの時代の急激な変化は一人人間にとっては厳しすぎた。私自身も何度も行詰ったし、精神的、物質的困難に打ちのめされた友人などから相談も多く受けた。この種の困難は人と人とが静かに話し合うことにより解かれる場合が多いが、私自身は弱い一人の人間にすぎないので、共に悩みを乗り越えてゆくよう努力するのだが、一体どうして直面している問題が解決できようかと思うことも多い。昔からそうであったように、この場合、哲学書、思想書それに宗教書を読み、自己の内なる心を洗い直し、新しい心で再出発すれば新しい意欲が得られ、新しい道が開けてくると思う。

私は情報の流れが激しいだけに、逆に、良書との深いふれあいを大事にしたい。

(工学部教授 有機工業化学)

より充実した明日のために

小 島 義 夫

知らないより知っていた方がよい。あらゆる錠前を開けることは、何も泥棒にならなくとも生計の道にも可能性が多いことになる。一方、知らない方が幸な場合もある。落第や失恋の苦悩等はその種類であろうか。しかし、文学の分野や、極限の世界にあってはそれらの体験も意味なしとはしない。真に人間味のある医者とは、己の専門のあらゆる病気を体験した者ではなからうか？と密かに考えてみる。しかし、これでは医者が育つまい。

旅の車窓からながめる自然の移り変わりは我々の眼を楽しませてくれるが、その自然を構成しているものの知識が乏しい私などは、何時も樹木や草花の名前や生理をわきまえていないことを口惜しく思う。とりわけ、日本在来種の植物や動物には(多くの場合、それらはひっそりと生きているのだが)見るだけで心とむものが多い。それらについて十分な知識があれば、来年も、再来年もより充実した刻を持つことができる筈である。自然科学とは、正に自然の中に秘められた法則を探り求める学問の分野であろうと思う。従って、自然科学の中には我々が知らないと直接間接に損をすることが多い。「百聞は一見にしかず」というが、

我々は全てのものを直接見ることは不可能であろう。そこで記録に頼ることになる。

記録としての書物は現在、自由主義を提唱する我国では比較的恵まれた状態にある。現に毎年出版される書物の数は膨大なものがある。一方、我々に与えられた時間は限られている。この時間を有効に活用することは、良書の選択にあると言っても過言ではあるまい。しかも情報過多の現代では、むしろ情報の選択に迷うくらいである。以前新聞で「大学生としての4年間に岩波100冊の本を読むことに決めた」若者の記事を読んだことがあるが(100冊の本とは、100書目であって実際1974年の新選では文庫本216冊程である)、大いに感心し、祝福した。他に、中学から高校にかけての教科書に載せられている抜萃について、原本・訳本を通読するのも一法であろう。さらに、自分があのような人になりたい、と願う人に、専門や一般教養の書物を直接推薦していただくのも近道であろう。

いずれにせよ、書物はテレビやラジオのように、画一的な情報の一方的な押し売りをすることなく、活字は整然としてひそやかに読者の視線を待っている。しかし、「所詮、書物は著者の体験と年代を重ねなければ本当に読んだとは言えない」と主張する人もあるが、望むべくもないし、こだわる必要もないと思う。本を読んで野球が上達したとか、剣道の練士になった等という話は聞かないので、書物にもおのずから限度がある。大学は、森の小人や、アトラスを育てる場ではなく、健全なる肉体と良識としての知識を両輪として、若人の個性豊かな資質をひき出し、同時に人格を磨き上げる機関である。

重苦しい受験時代から開放された諸君達にとって、身の囲りの全てがみずみずしく映ることであろうが、一刻一刻を大切に、充実した読書の習慣を身につけられんことを望む。

(農学部教授 家畜繁殖学)

■ 図書館間の貸借

必要な図書で本館にないものは、国会図書館等で図書館間の貸借(相互貸借)や複写サービスを受けられます。参考室には各図書館の刊行した蔵書目録が備付けてあり、これにより所蔵箇所を確認し、運用係に申込みください。国内に見あたらない図書は参考調査係に相談し、外国図書館に依頼出来ます。

雑感 「むだ」

西山 裕

世間でよく言われる言葉に“むだをはぶく”という言葉があります。いったい“むだ”とは何でしょう。“むだ”は“無駄”と書きますが、この漢字の字義からすれば、“馬が荷物をしょっていないこと”を表わすわけで意味は近いけれども、語源的には当て字であるということが、ある本に書いてありました。『大言海』には、「空(むな)」、もしくは「黙(もだ)」の転じたものと書いてあります。「もだ」は「もたず」の語根で、“だまっている状態”を表わす言葉ですし、「むな」は「むなし」の語根で“中身がない”ということですから、「むな」説の方がもっともらしく思われますが、はっきりした語源はわかりません。いずれにせよ、“むなしいこと、してもかいたくないこと、無益なこと”——これが「むだ」という言葉のもつ意味だそうです。

そう考えてみると、わたしはずい分と“むだ”をしているようです。「むだ話、むだづかい、むだ食い、むだ骨折り」などとにかくいろいろとむだをしているようです。もっともむだに時間や金が浪費できるのが大学生の特権ですけれども。そして、わたしもその例にもれず、時間の浪費が好きなのです。それでこの頃では、むだなあがきなのですが、よく図書館に行くようになりました。それでもやはり、勉強せずにむだをやっているようです。やたらといろいろな本を引きだしては、読まずに、気やすめに並べて置くだけで勉強しているような気になるのです。それに本が必要でもないのに図書館にいてということも、図書館の本を読むという利用原理からいって、はずれているし、むだなことかもしれません。それに図書館に行って本を利用するにしても、閲覧カードを用いずに、本棚にいて本の題名をみて必死に探す人や、あてもなくいってこの本ならよいだろうという感じで引き出ししている人、とにかく図書館の利用方法にしても“むだ”が多いようです。そしてわたしにとってなによりも多いのは、勉強をするために本を調べに行った図書館で文学書や、他の単行本等を読んで時間を“むだ”にしていることです。もちろん、勉強をしていない点から言

えば“むだ”ですが、はたして他のような本を読むことが“むだ”でしょうか。例えばわたしが“むだ”について読んだ「にっぽん語風俗学」等はまさに、何について読もうとか、學術書を読んで教養をつけようとかいう点からいってはずれているし“むだ”かもしれません。しかし、わたしは、この本を読んでみたいへん面白くて好きになってしまいました。そのせいか、むだに本を読んだという気が全くしないのです。その内容には、『「むだ口」はもともと、ことばの遊びの一種で、おいしいものを食べたあとで「ああ、馬勝った。牛負けた」とか、「そうか」と返事するところを「草加、越ヶ谷、千住の先だ」などとよいいなものをくつつけていうやっがそれです』ということが書いてありました。他にも、ことばの品定めとして「あきない、みせ、のれん、しにせ、ありがとう、すいません」等、いろいろとことばについての面白い由来ばなしが載っていました。こんな本や、他にも面白いだけのために読む本や、題名に引かれて興味本位で読む本など、わたしにはさまざまな“むだ”な本があります。しかし、それらがわたしの生活の一部でありわたしの教養——いや雑学の種なのです。今日みたいに本がはんらんし、多くの種類の本が身のまわりにあるわたしたちにとって“むだ”本を読むことは多いでしょう。女の人が化粧をして人目を引くように、本は奇抜な題目や、文章の書き出し、興味をそそる数字、統計、またものめずらしい事実によって、わたしたちの目をそそります。そしてそれを読むことは一見多くの學術書や古典を読むよりはるかに“むだ”かもしれませんが、しかし、今日のようにんざりするほどの“紙と文字”にかこまれているわたしたちは、読むことにあきあきしています。その中でわたしたちの目を引き、文字に親しませてくれるのが“むだ本”であることは事実です。新聞や雑誌、そして“興味本”ともいえるような“むだ本”がわたしたちに一般常識をつけてくれます。いろいろな“むだ”を通して、わたしたちは育っていきます。そう考えてみると“むだ本”を読むことも、又、他の一見むだに見えることも決して本当の“むだ”ではないような気がします。“むだ”も取り方、拾い方次第で充分有益なようです。

(農学部 昭和49年入学)